

第2章 山口大学構内吉田遺跡の概略

現在の大学キャンパス内に遺跡が埋存している可能性は、遺物の散布から昭和20年代より予想されていた。しかるに、大学が昭和41年からこの地へ統合移転した際、工事中に遺物の出土をみたことが契機となって構内遺跡の調査、研究が開始された。当初は遺溝、遺物の有無および遺跡の範囲確認調査が主として実施され、翌昭和42年には学長を団長に小野忠熙氏を中心とした関連分野の専門家によって山口大学吉田遺跡調査団が組織され、統合移転諸工事にともなう発掘調査に着手しながら、吉田遺跡の内包する諸要素の抽出ならびに全体像の解明へと動き出した。そして、昭和53年には山口大学埋蔵文化財資料館が設立され、調査団の業務は着実に継承、発展されることになった。

調査団は大学キャンパス内を五地区に大別し、必要に応じてその内部に小地区を設定しながら発掘調査を行なっている(図2)。この大略は調査概報等^{註1)2)3)}によって知りうるが、現在当資料館に保管されている資料も合わせてその結果の概要を述べておく。

第I地区

キャンパス内の北部にあたり、姫山南麓から南西に伸びる低い洪積台地およびその周縁の沖積段丘上に立地する。標高約23m、現水田面との比高は約4mである。発掘調査はA・B・C・D・Eの五つの地点で行なわれている。A、B両区では発掘面積が狭いため、須恵器、土師器の包含層、弥生時代中期の竪穴住居跡と思われる掘り込みおよび柱穴群を確認するにとどまっている。C区は西方に伸びた台地が低地に接するあたりの傾斜変換点付近にあたり、3基の弥生時代後期の土壇、古墳時代に属するものと思われる2基ないしは3基の竪穴住居跡、土壇、溝状遺構等が検出されている。また、調査区全域にわたって古墳時代から歴史時代にかけての柱穴が数多く認められた。D区では排水溝掘削にともない7ヶ所で調査が行なわれ、第4地点で弥生時代中期の円形プランをもつ竪穴住居跡、第3・第6地点で古墳時代の竪穴住居跡をそれぞれ1基検出している。また、第3地点を除く各地点で溝が検出されているが、第5地点と第1地点に認められる弥生時代中期の溝および第2地点と第6・7・4地点に認められる弥生時代の溝との2条に集約されると調査者は述べている。E区は第I地区の東方標高約24mの台地に位置し、弥生時代および歴史時代の遺物包含層の下部に各時期、各種の遺構・遺物を確認している。竪穴住居跡は古墳時代前期のものが6基認められ、形状不明の2基を除いて一辺3.2mから5.0mの方形およ

山口大学構内吉田遺跡の概略

び長方形の平面プランを持ち、いずれも壁溝を有していた。このうち2号住居跡からは東壁中央部付近を径約30cmの半円形に掘り込んだ造り付けの竈が検出された。また、4号住居跡は火災住居と想定され床面に焼土や住居の構造材の炭化物が出土した。この他、古墳時代後期の杭列をもつ溝、竪穴住居跡と同一埋土の土壌2基、歴史時代の柱穴等を検出している。出土した遺物は土器、石器のほかに土錘、金属器等多種にわたる。

第II地区

洪積台地上に立地する約30,000m²のうち南部の約2,000m²について調査を実施しており、古墳時代の竪穴住居跡および歴史時代の柱穴群が検出されている。また、調査区域内から結晶片岩の板石や埴輪等が採集されている。

第III地区

大学キャンパスの南西部にあたる地域で、沖積低地の最奥部に位置する。現在はグラウンドおよび野球場となっている。調査は四ヶ所について実施されている。トレンチを設定した試掘調査が行なわれた東南区と呼ばれる地点では、弥生時代前期および中期の竪穴住

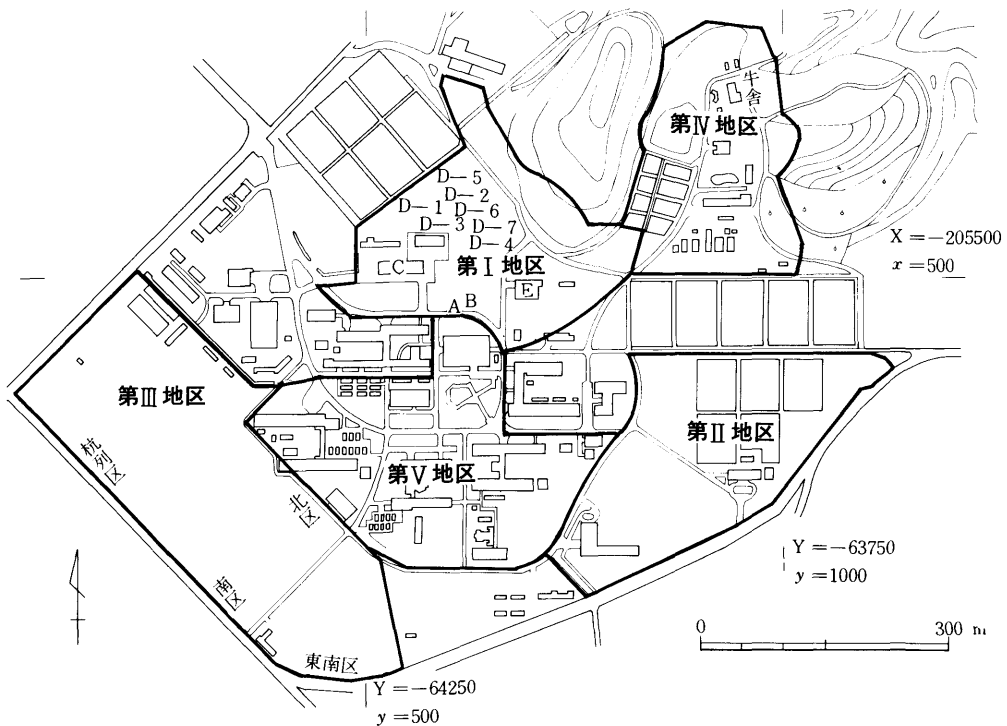


Fig. 2 吉田遺跡旧調査区区分図

山口大学構内吉田遺跡の概略

居跡が検出されたという。南区では1,600㎡の調査区域内で砂礫層および青灰色粘土層の堆積する幅約60mの河道が検出されており、下部に堆積する砂礫層より縄文時代晩期の土器片が出土した。また、その流路に堆積した黒色粘土層や泥炭層中からは弥生時代前期から後期の土器、須恵器、土師器、石錘、紡錘車、木製鋤のほか多種の植物遺体が出土している。南区の東北約120mにあたる北区における調査では、14基の竪穴住居跡をはじめとして多数の土壇、溝、柱穴等が知られている。旧来は水田として利用されていた地域で、キャンパス造成時による平坦化が起因して表土下約20ないしは30cmで遺構上面が検出される。現在資料整理中でその詳細は不明であるが、少なくとも弥生時代中期中葉から後半にかけてのもの2基、中期後半から後期初頭にかけてのもの6基、古墳時代前期のもの1基の3時期に大別される。各住居跡はいずれも削平が著しく、側壁の残存高は平均約10cm前後で、壁溝あるいはわずかに残存する側壁等によってその存在の判断されるものもある。検出された住居跡のうち13号竪穴住居跡は火災住居で、約7.6m×8mの長方形の平面プランをもつ。屋内施設として西側を除いた三側壁に沿って幅1.0mから1.5mのベッド状遺構、中央部に直径65cm、深さ16cmの円形の炉跡、また南部に1.5m×1.0mの楕円形の掘り込み（調査者によると炊事場）が認められたという。さらに榿木と思われる炭化材が約20本放射状に検出されたことなどから寄棟造の住居を想定している。各種の遺構から出土した遺物は弥生時代前期から後期の土器、須恵器、土師器などの土器類のほかに石鏃、石包丁、凹石、紡錘車等の石器類および管玉、小玉などである。なお、この地域は学内の協力を得て現地保存がなされている。北区の西、南区の北西にあたる杭列区と呼ばれている地域では、層位的に三段階の杭列を検出し、「上位は現在の杭で……(中略)……層位的に古い下位は矢板に似た割り材を密に打ち込んでおり、中位の杭列は小丸材を用い」て構築されていたという。各杭列にともなう遺物は不明瞭で時期比定については今後の検討を要する。

第Ⅳ地区

大学キャンパスの東北部にあたり、南にのびる二つの丘陵の縁辺部とこれらに挟まれた谷あいの地域である。附属農場牛舎新営にともない発掘調査が実施された。その結果、弥生時代の土壇1基、溝状遺構1条、古墳時代後期の竪穴住居跡2基以上および瓦器を出土した歴史時代の竪穴住居跡が検出されている。遺構は削平が著しく、遺物もまた磨滅の進んだ破片が大半である。

第Ⅴ地区

大学キャンパスのほぼ中央部分から南部にかけての地域である。黒色、暗青灰色のシル

山口大学構内吉田遺跡の概略

トおよび粘土層や泥炭層が堆積しており遺構はほとんど検出されていない。しかし、南西部において河川跡が検出され、内部から弥生式土器、土師器が出土している。

以上、調査団による発掘調査の成果を概観してきたわけであるが、調査区外の地域、例えば第Ⅰ地区の東方や西方の地域あるいは第Ⅲ地区東南区の東方の地域などにおいては資料が欠如している為、その内容について言及することは甚だ困難な状況にある。

〔註〕

- (1) 小野忠熙 「山口大学吉田遺跡」 『考古学ジャーナル』 第9号 1967
- (2) 同上 「山口大学構内吉田遺跡の性格」 『学園だより』 第6号 山口大学 1970
- (3) 山口大学吉田遺跡調査団 「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」 1976